

平成 22 年 5 月 17 日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2011

課題番号：19520506

研究課題名（和文）北米式TESOLを通して日本の若手研究者を育成する：可能性と課題

研究課題名（英文）Nurturing young Japanese researchers through North American model of TESOL program: Possibilities and challenges

研究代表者 坂本 光代(SAKAMOTO MITSUYO)

上智大学・外国語学部・准教授

研究者番号：30439335

研究代表者の専門分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・外国語教育

キーワード：英語教育、大学院教育、アクションリサーチ、応用言語学、TESOL

## 1. 研究計画の概要

平成18年度より、上智大学大学院外国語研究科では従来の応用言語学プログラムの他、北米式英語教授法（TESOL、Teachers of English to Students of Other Languages）；他言語話者に対する英語教授法）プログラムが大学院前期課程より始まった。全て英語で授業を行う大学院におけるTESOLプログラムは日本では他に例を見ない。国際的外国語教育専門家レベルの応用言語学者を育成・輩出することに関し、様々な試みを導入し、縦断的研究としてその成果を研究、発表することにより、今後の日本における英語教育一般に寄与することを目標とした。

具体的には本プロジェクトは、上述の分野で先進的な北米での大学院教育制度を参考にしながら、大学院生の1) 国際学会への参加、2) 国際学術誌への投稿の奨励、3) ティーチング・リサーチャー（略GTR）として学部生への指導制度の導入・充実化、4) 研究・就職に関する指導などを図ろうとするものである。この目標達成のため4名の教員（吉田、渡部、和泉、坂本）が指導を担当した。

## 2. 研究の進捗状況

この3年間の主な成果は下記の通りである：

## (1) 平成19年度

後期よりGTR助成プログラム開始（和泉はサバティカル（研究休暇）にて直接関与していない）。

①吉田が、GTRとASTE（Association of Sophia Teachers of English）にて共同発

表。共著論文をASTEニュースレターに掲載。

②渡部が *Sophia TESOL Forum*（本校TESOLプログラム大学院生のワーキングペーパー集）刊行。

## (2) 平成20年度

①国際応用言語学学会にてシンポジウムを開催、本プロジェクト教員と大学院生で共同発表。

②坂本がGTRとデータ収集、分析、論文執筆。

③吉田がASTEにてGTRと共同発表。共著論文をASTEニュースレターに掲載。

④渡部が *Sophia TESOL Forum* 第2巻を刊行。

⑤和泉がサバティカルより戻り、GTRと研究プロジェクトを立ち上げる。

## (3) 平成21年度

①坂本が前年度執筆した論文が大学の学部紀要に掲載される。新研究プロジェクトを立ち上げ、データ収集、分析をGTRと行い、単著で論文執筆、国際学会（EUROCALL）にて発表。GTRも参加。

②吉田がASTEにてGTRと共同発表、ASTEニュースレターに共著論文掲載。また、GTRと共同でデータ分析結果に基づき、他6本の論文が発表された。

③GTRとの共同作業で進めてきた図書翻訳が完成し、出版された。また、*Sophia TESOL Forum* 第3巻も刊行された。

④和泉がTESOLプログラムの検証をす

べく、GTR と独自でアンケートを開発、実施、分析し、学会発表などに勤しんだ。大学院生と共に調査やデータ分析、発表、論文執筆に励み、その過程を院生と共有することで、院生にとっても有意義な経験となった。自分が関わったデータ分析がどのように論文として執筆され、国内並びに国際学会での発表に携わることで、大学院生に文献調査、研究デザイン、データ収集、分析、執筆、発表と、研究における一連の作業を把握してもらうことができた。

### 3. 現在までの達成度

②おおむね順調に進展している。

教員4名によるメンターシップの他、大学院生も自ら進んで修士論文執筆に関するデータ収集や分析などについてワークショップを年に2回開催してきた。修士論文の中間発表会も平成20年度より毎年12月に開催し、盛況を収めてきている。大学院生の学びを充実させ、若手研究者としての成長並びに自主性を促すのを目的に本研究が取り入れた院生助成プログラムは着実に目的を達成している。

一方今後解決すべき問題もある。例えば平成19年度より英語教授法プログラムに在籍する大学院生らに学会登録費の助成をあわせて行ってきたが、毎年4名の本プログラム参加大学院生の謝金を確保しながら、さらに学会参加費や旅費などを支出するには予算が不足しがちである。一昨年はドイツの学会で成果を発表したが、ユーロ高や燃料費の高騰による資金不足等により、目的の達成の支障となった。さらに、本専攻には英語教授法専攻の学生だけでなく、応用言語学や理論言語学の院生も在籍するため、英語教授法の学生だけに特化した本プログラムが大学院生の間で不平等さを生み出している。

### 4. 今後の研究の推進方策

現在の助成プログラムは、概ね軌道に乗り、機能しているといえる。そのため、引き続き大学院生に対する支援を行いたい旨、指導教員全員により確認された。本学独自のプログラムとして、大学院生のための助成金もあるが、それは比較長期に亘る海外研修などが中心であり、研修先が決定した上で申請しなければならないなど制約が多い。本学大学院生は職を得ながら学術研究にかかわり、また家庭がある者も多い。しかしながら、今後我が国の大学院はこのような学生を対象にした再教育の場としても機能すべきであろう。したがって、本取り組みがモデルとなるように、彼らのニーズに合った大学院教育の理想の在り方を

示すためにも、本プロジェクトを継続し、英語教授法のみならず応用言語学履修者にも拡大する必要があると考える。具体的には同主旨の申請を再度行う予定がある。さらにこのような試みが競争資金だけではなく、常態として保持され運営されるように、そのモデルには経済的基盤の確保などを含めたものにしたいと考えている。

### 5. 代表的な研究成果

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計2件)

① Sakamoto, M. & Honda, Y. (2009). Homepage Making and Interaction: Effects of Technology-Driven Collaborative Tasks on Social Interaction and L2 Writing. Proceedings of the International Wireless Ready Symposium. Vol. 3, pp. 16-19. 査読有り

② Yoshida, K. (2009). The new course of study and the possibilities for change in Japan's English education. 生井健一、深田嘉昭、他(編)「言語・文化・教育の融合を目指して-国際的・学際的研究の視座から」開拓社 pp. 387-400 査読無し

[学会発表] (計3件)

① 和泉伸一 Focus on form in English language teaching in Japan (日本の英語教育でのフォーカス・オン・フォームの役割). 東京私立中学高等学校協会主催講演会、2009年11月17日アルカディア市ヶ谷(私学会館)

② Sakamoto, M. Using Online Social Networking System (SNS) to promote L2 writing: Exploring possibilities in Japan. EUROCALL 2009, September 10, 2009. Universidad Politecnica de Valencia, Spain.

③ Sakamoto, M., Yoshida, K., Watanabe, Y., Izumi, S., Hanaoka, O., Maruyama, Y. Symposium: TEFL in Japan: Where it's at, where it's headed. AILA 2008, August 25, 2008. Essen, Germany.

[図書] (計1件)

渡部良典(編訳) 春風社『言語テストの作成と評価』(2010)、274ページ